

1巻 地元学からの出発

この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける

結城登美雄(民俗研究家)

明治二十一年に二万五八五九あった全国の市町村は、昭和、平成の合併を経て一八〇〇へと激減した。しかし人が暮らす場としての集落は、明治元年の七万三三四の九五%が平成の今も健在だ。むらむらであり続けた力とはいったい何か。その力をその具体的に暮らす人びと自身が取り戻し、「自前のものさし」でよりよくしていくための手法・考え方が「地元学」。食の文化祭、鳴子の米プロジェクト、なんでもや、共同店など、全国各地の多様な実践にかかわる著者の集大成。

第1章 地域とは何か？むらむらであり続けた力とは
第2章 地元学とは何か？この土地を生きた当事者に学ぶ
第3章 よい地域の七つの条件
第4章 各地の実践から



(2010年1月刊予定)

7巻 進化する集落営農

地域社会営農システムと農協の新しい役割

楠本雅弘(前山形大学、農山村地域経済研究所)

集落営農は試行錯誤を繰り返しながら実践経験を積み重ねて柔軟に進化し、地域の再生・活性化と効率的農業生産とを両立する「地域営農システム」としての大きな可能性を備えるに至った。農協を含めた全国各地の実践事例を紹介しながら、「2階建方式の地域営農システム」としての集落営農こそが地域を再生し、日本農業・農村の将来展望を拓く方途であることを具体的に示す。

第1章 集落営農の定義と政策的評価
第2章 集落営農の組織と運営
第3章 地域営農システムとしての多様な展開
地域の再生・希望の拠りどころ
地域の再生・活性化を担う可能性の再確認

(2010年2月刊予定)

15巻 雇用と地域を創る直売所

人間復興の地域経済学

加藤光(信州大学)

(2010年3月刊予定)

2巻 共同体の基礎理論

「個人の社会」から「関係の社会」へ

内山節(哲学者)

すべてを商品化され、貨幣が増殖していくなかで経済が展開する世界が破綻を迎えるなか、等身大の世界をつなぐことが求められている。個人と国家をベースとした近代的な世界観から克服すべき対象とみられていた共同体を、世界の組み替えのベースとしてとらえなおし、新しい「関係としての人間/社会論」を構築する大胆な試論。

内容は部変更する場合があります。

農文協創立70周年記念出版

危機の時代を希望の時代に

シリーズ 地域の再生 全21巻

地域に生き、地域を担い、地域をつくる人々のための実践の書

今、私たちの行く手には暗雲が立ち込めているように見えます。私たちは、「近代」の行き詰まりともいえるこの危機を、根本的に解決する主体は国家や国際機関ではなく、「地域」だと考えています。都市に先んじてグローバルシステムと新自由主義に翻弄された農山漁村は、すでに元氣と自信を取り戻しつつあります。その元氣と自信は「近代化」「画化」の方向ではなく、地域ごとに異なる自然と人間の共同性、持続的な生き方、自然と結んだ生活感覚、生活文化、生産技術、知恵や伝承などを見直すことによってもたらされたものです。

また、近代的「所有」や「業種」の壁を乗り越えた、流域連携や農商工連携による新しい仕事おこしも始まり、それを支援する官民の動きも活発になってきました。農山漁村における地域再生の芽が意味するものを学ぶことで、都市における地域も再生への手がかりをつかむことができるのではないのでしょうか。人びとがそれぞれの場所でそれぞれの共同の世界としての「地域」をつくる。私たちは、そこに希望を見出しています。危機と希望が混在する現在、地域に生き、地域を担い、地域をつくる人びとのための実践の書 地域再生の拠りどころとなるシリーズをめざします。

農文協(社)農山漁村文化協会 注文専用フリーダイヤルTEL.0120-582-346(平日9:00~18:00) FAX.0120-133-730(24時間受付)
〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1 TEL.03-3585-1141 FAX.03-3585-3668
http://shop.ruralnet.or.jp/ *価格は改訂の場合もございます。*本カタログの内容は、2009年7月現在のものです。

地域の再生 全21巻 全巻揃予価 57,330円(本体54,600円) セット(定期配本)

氏名(団体名)	ご住所(〒)
(ご担当者名)	
TEL () -	FAX () - E-mail



四六判上製 平均280ページ
予価 2,730円(本体2,600円) 全巻揃予価 57,330円(本体54,600円)

社団法人 農山漁村文化協会

本シリーズの特徴

在野の研究者を含め、つねに現場にかかわりながら、学問の垣根を越え、新しい領域に実践的に挑戦する執筆陣。自治体・農協職員、地域リーダー、NPO、大学、企業など、地域づくりの現場からの課題にこたえ、新たな展望を拓く、全巻書き下ろしの提言・実践集。

本シリーズの4ジャンル

- 1 地域と世界を往復する**
地域再生の意味をみんなで深め、共有するために
地元学の視点から、歴史的な視点から、地域主権の立場から、食料主権の立場から
- 2 施策と組織を生かす**
各種の施策を地域になじませ、地域再生に生かす
手づくり自治区、自治体、農協、NPO、集落営農、各種経営体、農地の担い手問題など
- 3 暮らしを伝承・創造する**
地域の個性に満ちた生活文化、知恵や伝承を現代に生かす
家族、女性から、教育、民俗文化、福祉まで
- 4 風土に根ざした生業をおこす**
地域を支える仕事と地域産業おこしのために
農工商連携、流域連携で地域資源に働きかけ、地域という業態「風土に根ざした生業を創造。直売所、水田、里山、遊休農地、山林、海の活用から農業技術・農法まで

1 地域再生の意味をみんなで深め、共有するために

- 1 地元学からの出発**
この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける
結城登美雄(民俗研究者)
過疎高齢化とはいえ、むらびらであり続ける力とは何か。その力を、「こゝ」に暮らし人びと自身が取り戻し、「こゝ」をよりよくしていく地元学。各地の実践をふまえた手法と思想。

2 共同体の基礎理論

- 2 共同体の基礎理論**
「個人の社会」から「関係の社会」へ
内山節(哲学者)
大塚久雄、守田志郎らの共同体論を批判的に考察。個人をベースとした近代的な世界が限界を露呈するなか、その組み替えのベースとなる、新しい社会論「共同体論」の構築を試みる。

3 自治と自給と地域主権

- 3 自治と自給と地域主権**
グローバル化の終焉、農の復興
関野(思想史家)藤澤雄一郎(農業)
グローバル化による破綻、世界貿易縮小の危機と混乱を突き抜けて、人びとに希望をもたらす小農の論理「ロカライゼーション」による地域の再生、自給による国民経済の再生。

4 食料主権のグランドデザイン

- 4 食料主権のグランドデザイン**
溶解するWTO体制と反貿易至上主義運動の諸相
村田武(愛媛大学)・久野秀二(京都大学)・真嶋良孝(農民連)・早川治(日本大学)・加藤好一(生活クラブ生協連)ほか
WTO以降の輸出強国・巨資本主導の食糧農産物貿易の実態とそれを行き詰まらせる諸運動を分析。各国・地域の食料主権構築のグランドデザインを提案。

2 各種施策を地域になじませ、地域再生に生かす

- 2 各種施策を地域になじませ、地域再生に生かす**
手づくり自治区の多様な展開
「コミュニティ」の再生で元気な地域づくり
小田切徳美(明治大学)・田村尚志(山口県農林水産部)ほか

4 地域を支える仕事と地域産業おこしのために

- 4 地域を支える仕事と地域産業おこしのために**
雇用と地域を創る直売所
人間復興の地域経済学
加藤光(信州大学)
二極化が進む直売所の「本来の姿とは何か」を、直売所を開設している人、これから始めようと考えている人(行政・農協・農業者)双方にある地方小都市の事例を基に訴える。

16 水田活用 新時代

- 16 水田活用 新時代**
減反・転作対応から地域産業興しの拠点へ
谷口信和(東京大学)・梅本雅(農研機構・中央農総研)・千田雅之(農研機構・中央農総研)
世界的・歴史的視野で展望する新しい水田農業。麦、ダイズなど、水田を活かした地産地消・農工商連携の展開。棚田放牧から飼料イネまで、耕畜連携と家畜のいる地域づくり。

17 里山・遊休農地をとらえなおす

- 17 里山・遊休農地をとらえなおす**
現代に生かす伝統の知恵
野田公夫(京都大学)・重松敏則(九州大学名誉教授)・九鬼康彰(京都大学)
里山利用と遊休農地の再生には、近代化の中で軽視されてきた伝統的な仕組みの再評価と新しい担い手づくりへの豊かな想像力が求められる。市民参加型を含めた再生プランを示す。

18 森業 林業を超える生業の創出

- 18 森業 林業を超える生業の創出**
関係性の再生が森を再生させる
家中 茂(鳥取大学)ほか
建材にも合板にも使えない材を地域通貨に換え森を再生する。「自伐林業の森業」や、六次産業を超えて下流域と連携する「トータル林業」などから、地域という業態「の創造を展望」。

19 海業 漁業を超える生業の創出

- 19 海業 漁業を超える生業の創出**
海の資源・文化をフル活用する
豊 小波(東京海洋大学)
漁村振興「漁業振興」という視点を超え、民宿・直売所・教育など、地先の海の資源を多元的に生かす。「海業」の

農村についてもその8割は非農家である現在、農家と非農家の連携で地域の「周辺化」を防ぐ「コミュニティづくり」の重要性が増している。その実態と課題、展望を具体的に詳述。

6 広域行政と地域間連携

- 6 広域行政と地域間連携**
大小相補の地方自治とむらまちづくり
保母武彦(鳥取環境大学)・村上博(香川大学)ほか
行政村と自然村の関係を下からの重層的自治関係へと再編し、都市と連携しながら非合併・自立をめざす小規模自治体の動きを分析。合併自治体の課題や改革方向も問題提起。

7 進化する集落営農

- 7 進化する集落営農**
地域社会営農システムと農協の新しい役割
楠本雅弘(前山形大学教授)・農山村地域経済研究所)
農村経済更生運動以来の歴史、政策の流れも整理しながら、むら維持し生産の効率も上げるための全国各地の農協も含めた具体的な実践事例を紹介、その意味と未来を論じる。

8 地域をひらく多様な経営体

- 8 地域をひらく多様な経営体**
農業「ビジネスをむらに生かす」
秋山邦裕(鹿児島大学)
営利・非営利の法人は農業を変えるか。典型的な事例を踏まえながら、農産物生産のみならず、福祉・医療など公益的な事業展開も含め、法人・企業による農業の可能性を示す。

9 地域農業再生と農地制度

- 9 地域農業再生と農地制度**
日本社会の鐘「むらと農地を守るために」
原田純孝(中央大学)・田代洋(大妻女子大学)・柳沢能生(早稲田大学)・谷脇修(全国農業会議所)・高橋寿一(横浜国立大学)・安藤光義(東京大学)・岩崎由美子(福島大学)ほか
法学、農政学両分野の論者が歴史、法理論、政策、地域の実態を洗いながら改正農地法の本質と陥穽、地域に根ざした多様な担い手による地域農業創造の胎動と意味を明らかにする。

10 農協は地域に何ができるか

- 10 農協は地域に何ができるか**
販売を核に、4つの特質を現代に生かす
農文協編
巨大合併が進み、その数が自治体の半分以上になってしまった今、地域にとっての農協「農協にとっての地域」

20 有機農業の技術論

- 20 有機農業の技術論**
「つくる農業」から「できる農業」へ
中島紀(茨城大学)
有機農業を「農業的自然論」の立場からとらえ直す。自然を客体としてとらえ、働きかける科学技術ではなく、自然に「働きかけられる労働」の側から農業技術論を再構築する。

21 むらをつくる百姓仕事

- 21 むらをつくる百姓仕事**
「技術」では地域をつくれぬ
宇根 豊(農と自然の研究所)
地域づくりのベースは農家が営々として築いてきた「あたりまえの仕事」を取り戻すこと。百姓仕事を「農と自然のめぐみ」の総体から光を当て、子孫に引き継ぐ仕事としてとらえ直す。

書名は変更する場合があります。



が改めて問われている。作目別・農協タイプ別販売事業をベースに、福祉・交流事業も含め、農協と農協マンの知恵を結集し、地域に信頼され、頼りにされる農協像を浮き彫りにする。

3 地域の個性に満ちた生活文化、知恵や伝承を現代に生かす

- 3 地域の個性に満ちた生活文化、知恵や伝承を現代に生かす**
集落の未来をひらく
徳野貞雄(熊本大学)・柏尾珠紀(龍谷大学非常勤講師)
人口減少を前提に、「世帯」ではなく他出した者を含む「家族」から、集落の機能を維持し、未来を展望する理念と手法を示し、集落の再生に果たす女性の役割をあわせて考察する。

12 農の教育力

- 12 農の教育力**
「地の教育」から「場の教育」へ
岩崎正弥(愛知大学)・高野孝子(ECCOPLUS)
江渡狄嶺、三澤勝衛などの「地の教育」の系譜を歴史的にたどり、その土地固有の知恵や文化に依拠しながら、国家主義にからめとられない「場の教育」の可能性を考える。

13 遊び・祭り・祈りの力

- 13 遊び・祭り・祈りの力**
現代の「モンス」とローカル・アイデンティティ
菅 豊(東京大学)・安室 知(神奈川大学)・藤村美穂(佐賀大学)
「神楽のために年を耐える」という若者たち。経済効率や利便さではとらえきれない「地域の再生」の原点としての「こゝ」を、ともに生きる楽しみをこらえる新たな観点。

14 農村の福祉力

- 14 農村の福祉力**
福祉の原点を「こゝ」にみる
池上甲(近畿大学)
社会的・環境的福祉資源とその活用システムが根づいている農村的な地域においてこそ、新しい福祉のあり方が様々に展開している。その全社会的意味と今後の具体化の展望を提示。

